

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

# 児童の情報活用能力の育成に関する調査

## ～児童の学習意欲と情報活用能力の育成を中心に～

三宅 正太郎

総合学習の時間はじめ、学校教育にコンピュータを導入した学習活動が定着しつつある。そのねらいとしては情報活用能力育成を求めている。しかし、情報教育が機器操作の段階にとどまっていては、真の情報活用能力の育成にはほどとおいものである。情報の操作を含め、情報を批判的に取得し活用できる力を育成するために、現状の把握を行った。機器の操作については、学校や家庭での教育によって獲得できるが、批判的な活用能力の育成は意図的な指導が必要であることが明らかになった。

[キーワード：情報活用能力・メディアリテラシー育成・調査研究]

### 1 はじめに

情報化社会と言われる現代、多くのメディアと接し、様々な情報を容易に獲得することができる。例えば、音声・画像・文字などがあらゆる領域を超えて飛び交うことで、われわれの生活に、娯楽や知識を与え生活になくてはならないものとなっている。この傾向は、ますます発展し、これから先も留まることがないであろう。このような現状を、情報の波に押されることなく豊かに生きていくためには、巷にあふれる情報をただ受身的に視聴するだけでなく、自分自身が主体的・批判的な視聴をすると共に、情報の送り手として、発信する方法・受け手に正確に伝えるための方法・利用するメディアの特性などを知ることが必要になってくる。そこで、メディアリテラシーの獲得が不可欠になってくる。

一般には、メディアリテラシーとは、あらゆる情報を鵜呑みにすることなく、批判的に読み解いていく能力と言われる。しかし、水越伸氏によると、メディアリテラシーには「メディア機器使用能力」、「メディア鑑賞・享受能力」、「メディア活用・表現能力」とに分けられているという（水越、2002）。本研究では、その中の一つである「メディア活用・表現能力」の育成に視点を置き、実践を通して調べていくものとする。

近年、総合的学習の時間中にメディアを取り入れ、メディアリテラシーを学ぶという学校が増え始めている。メディアリテラシーを学ぶという目的で、情報教育とも呼ばれる。メディアをとり入れた授業は、パソコン・インターネットなどの操作を学ぶという目的で行われていると思われる。それだけではなく、あらゆるメディア機器を活用することによって、生徒にとっての表現の手段が増えるという目的をも含まれ、重要視されている。そこで、メディアを活用することによって自分に必要な情報を集め、より繊細なものとして創りあげ、一

### 三 宅 正太郎

人の課題として留まらせるのではなく、多くの相手に発信できるようになっていくためにはどのような活動がなされ、どのような実態であるかを調べていくことにする。そして、メディアを活用することによって表現の幅の広がりを見せる中で、自分で課題を見つけたり、未体験の課題を分析し隨時必要な知識を自分で調べ上げていくことによって、自発的な表現が生まれてくるかを明らかにする必要がある。

## 2 情報活用能力に関する構造について

### (1) メディア活用学習の構造

課題研究・総合表現・道具プログラミングなどを通し、情報活用能力の基礎を養うことで、メディアリテラシーの育成へとつながる一連の流れを示していた。

### (2) 本研究におけるメディアリテラシーについて

メディアの意味や構造を読み解き、メディアを活用し自らを表現することによって、新しいコミュニケーションを切り開いていく営みであると考える。

#### ○メディアを主体的に読み解く能力

情報を伝達するメディアそれぞれの特質を理解する能力

メディアから発信される情報について、社会的文脈で批判的（クリティカル）に分析・評価・吟味し、能動的に選択する能力

#### ●メディアにアクセスし、活用する能力

メディア（機器）を選択・操作し、能動的に活用する能力

#### ◎メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力

情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力

\*メディアリテラシーとは上記3つの相互作用であるといえる

### (3) メディアリテラシーの授業の視点

学年発達に応じて、情報活用能力の目標を計画的に配置する必要がある。

#### ○低学年

##### <情報活用能力の基礎>

身近な社会事象に触れ、見たり聞いたりする体験することを通して、したことを自分なりに伝えようとする。

#### ○中学年

##### <情報活用能力の応用>

自分の得た情報や解決した課題を相手に分かりやすく伝える。

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

### ○高学年

#### <情報活用能力の発展・深化>

得た情報をもとに、それらを自分のものとして理解し、発信・交流する中でさらに学習を進め、深める。

#### (4) 情報活用能力について

「学び方」の一つとして、身の周りにあるさまざまなメディアと、それが媒介する情報を活用して学習する能力が重要な役割を果たすことになる。この能力が「情報活用能力」であると、考えられている。情報活用能力は、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」とされているが、一連の情報活用の過程を行う能力が情報活用能力であると考えられる。なお、情報活用能力を「情報リテラシー」ということもある。リテラシー(literacy)はもともと「文字の読み書き能力」であり、文字を理解し活用する能力であるといえる。従って、これに「情報」を付加した「情報リテラシー」は、情報を活用する能力ということができる。

#### (5) 「情報教育」 情報活用能力を、学校や社会において育てる教育

文部科学省の立場から、情報教育を、学習指導要領では次のように明示している。

##### 「情報教育の目標」

1) 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

2) 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解（情報の科学的な理解）

3) 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度（情報社会に参画する態度）

\*情報教育を受けることによって、情報活用能力の育成や学習意欲の向上につながるとされている。

### 3 調査研究の概要

#### 1. 研究目的

メディアを活用しながら、自分の得た情報や解決した課題を相手に分かりやすく伝えていく中で、自己表現をより活発にし、コミュニケーションに役立てられるようになること。  
(情報活用能力の基礎ともいべき収集、加工、伝達の能力の育成)

#### 2. 仮 説

- ・メディア活用授業を通して課題解決のためにあらかじめ用意されている情報に加えて、個々の調べ学習に必要な物を教師や友達にリクエストしたり、自らの手や足で確かめた情報をもとに、学習を進めて行くこと。
- ・自分たちで新たなものを作りだし、伝えたいことや言いたいことをみんなに分かってもらうために、自分自身の言葉や態度で表現していくこと。
- ・等の実践を通して自分で課題を見つけ問題点を発見し、新しい結論を求める力(収集力・創造力)、自分にとって必要なものを選択する力(処理力)、未体験の課題を分析する力(判断力)、必要な知識を自分で調べていくことで、自分自身の意見をみんなに的確に伝える力(伝達力)などの情報活用能力が養われていくことによって、最終的にメディアリテラシーの育成に関係すると考える。

### 4 調査計画と調査方法

#### 1. 調査方法

実際にメディア機器を活用した情報教育が行われている小学校と行われていない小学校にメディア機器を活用した授業に関するアンケートと情報活用能力に関してのアンケート調査を行った。

(1) 【目的】情報教育の特徴を明らかにするため、実践校と非実践校の児童回答傾向の違いを比較する。

#### (2) 【対象者】

大分県O市立C小学校 6年生 (103名)

大分県B市立B南小学校 5年生・6年生 (71名)

大分県K町立A小学校 (37名)

・メディア機器を活用した情報教育が行われている小学校 2校

( B市立B南小学校・A町立A小学校 )

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

- ・メディア機器を活用した情報教育が行われていない小学校 1 校  
( O 市立 C 小学校 )

(3) 【実施日】 2002 年 12 月

### 3. アンケート内容

#### (1) メディア機器を活用した授業に関するアンケート

メディア機器（パソコン・デジタルカメラ・ビデオカメラ・テレビなど）を活用した授業に関する児童の取り組みや意欲について調べるために、15 の質問項目があるアンケート調査を行った。

15 の質問を以下の 3 つの大項目について、それぞれの質問してもらった。

##### 1) 情報を集める方法について

（総合学習の中で、信頼している情報源・よく利用する情報源について）

##### 2) パソコンについて

（利用頻度やインターネット等の情報の内容について）

##### 3) 総合学習の取り組みについて

（メディア機器に対する親しみの有無や、意欲の度合、授業を受けたことによる、情報に対する問題意識の変化などについて）

#### (2) 情報活用能力に関するアンケート

各項目の問に対して、「あなたの考えに近い所にチェックを入れてください。」という指示にたいして、「非常に当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」「どちらともいえない」「どちらかといえば当てはまらない」「まったく当てはまらない」の反応を回答してもらった。

##### 1) 「収集する力」について

・自らの目的に基づいて必要な情報を収集する。インタビュー、観察、実験、質問紙調査、図書館、パソコンの利用などができるなど 9 項目

##### 2) 「批判的に判断する力」

・他者によって伝達された情報を、その情報生成者の意図に即して理解することができるなど 9 項目

##### 3) 「表現する力」

・既成の処理方法を用いて素材としての情報を加工することができる。文章や絵などに表現することができるなど 6 項目。

##### 4) 「情報を処理する力」

### 三 宅 正太郎

・あらかじめ用意されたいくつかの情報の中から、自分にとって必要なものを選択することができるなど 7 項目。

#### 5) 「創造的に作り上げる力」

・多くの情報を集約していくことによって、問題を発見し、新しい結論を求めるなど 10 項目

#### 6) 「発信し伝達する力」

・自らの意思を他者に分かりやすいように表現したり伝達することができるなど 9 項目

\*これは、情報活用能力が収集・批判・表現・処理・創造・発信・伝達の全てを指すことから、一つ一つ項目を分けてアンケートを作成したものである

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

### 5 調査の結果

#### 1. メディア機器を活用した授業に関する取り組みについて

(1) 総合学習をしている中で、材料や情報を集める時に1番信頼しているものは何か

上記の結果を図1に示す。メディア機器を活用した情報教育を実施している小学校、実施していない小学校共に、パソコンをあげている児童が最も多いことが分かる。(3校の平均値46%)これは、パソコンが身近にあり、情報量も豊富で気軽に調べやすいということが大きな理由にあげられそうだ。次に割合が高い情報源はTVのニュースであり、情報教育を実施しているB小・A小の2校は、実施されていないC小にくらべそれぞれ12.3%、2.3%ずつ数値が高い。また、A小学校は、学校の先生とあげている児童が他の2校よりも8%高い。これは、総合学習の授業で番組制作をしているため、パソコンなどから得る情報に加えて、先生からの助言が必要な場面が多くある為と考えられる。

総合学習の中で情報を集める時に1番よく利用するものの結果を図2に示す。この結果では、パソコンをあげている児童の割合が、3校の平均値60%とさらに高くなっている。また、本や参考書の割合も「信頼しているもの」の場合と比べて高くなっている。この事から、実際に情報を集める段階で、専門的な情報量の多い書籍等が重宝されているのがうかがえる。

以上2つのグラフの結果から、1番信頼している情報源、1番よく利用する情報源とともに、「身近なもの、よく利用するもの、普段から親しんでいるもの」が上位にくる傾向があることが分かる。また、情報量や、図や絵、音声など、視覚や聴覚に訴えかけてくることも重要なポイントであると考えられる。

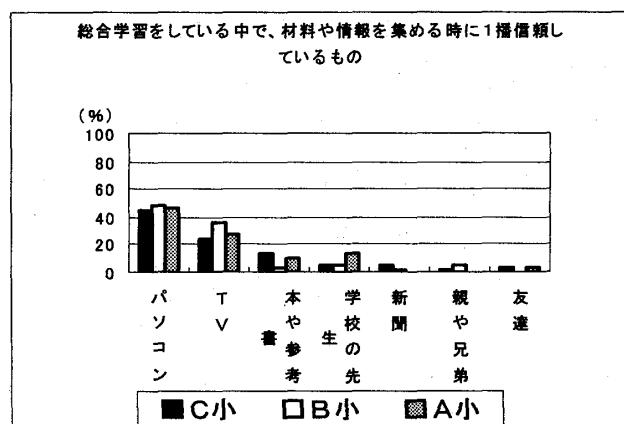


図1 信頼している情報源

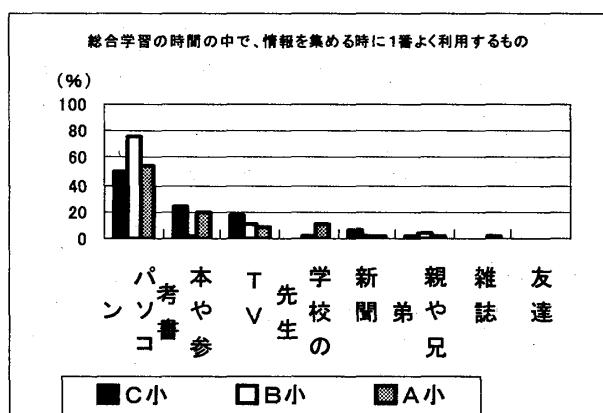


図2 よく利用する情報源

### 三 宅 正太郎

#### (2) メディア機器を使った授業は意欲がわくか

この結果を図3に示す。「非常に意欲がわく」、「意欲がわく」と答えた児童の割合がC小で79.6%、B小で80.3%、A小では75.6%と、それぞれ約8割の結果となった。しかし、最も高い数値が出ると考えていたA小が、3校の中では、最も低い数値となった。また、A小は「あまり意欲がわかない」「全く意欲がわかない」と答えた児童

の割合が、24.3%と3校の中で最も高い数値となり、「番組を制作することによって、授業に対する意欲も比例して高まるだろう」という当初の考えとは違う結果となった。この結果には、メディア機器に親しみを持っているかどうかという根本的な事柄が関係していると考えた。

#### (3) メディア機器に親しみを持っているか

この質問の結果は図4のとおりとなった。「持っている」「どちらかといえば持っている」と答えた児童の割合は、C小では81.6%、B小では77.5%、A小では83.8%となり、3校共に8割程度の児童が親しみを持っていると答えている。C小では情報教育を特に実施していないが、総合学習の時間にパソコン等のメディア機器を扱い普段から親しんでいるため、高い割合の結果がでたと考えられる。注目すべき点は、「親しみを持っている」と答えたA小の児童が半数以上(56.8%)いるということ

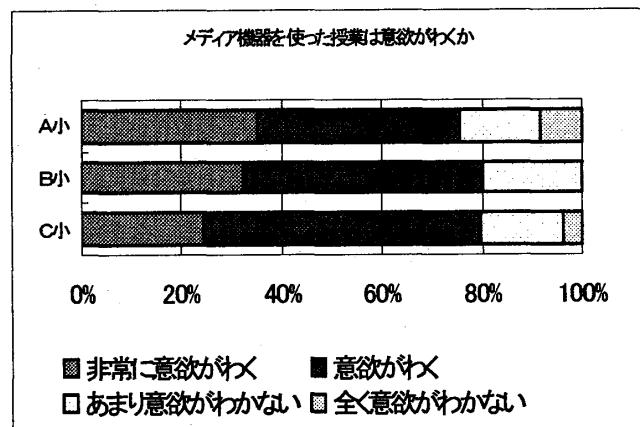


図3 意欲の度合い

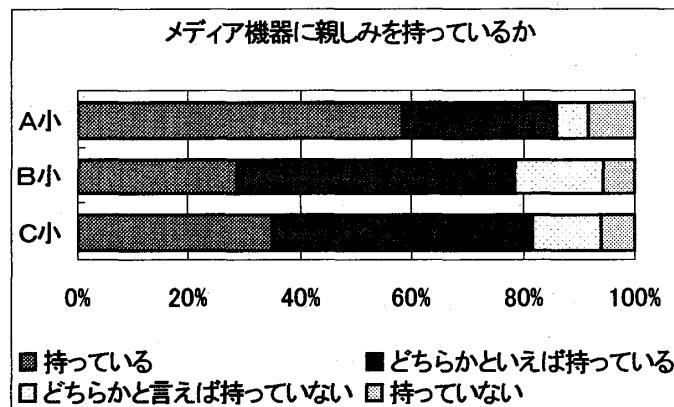


図4 メディア機器への親しみの有無

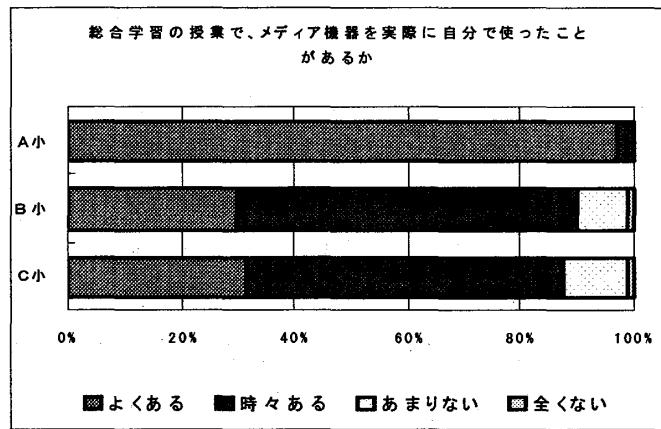


図5 メディア機器使用頻度

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

とである。

A小では番組を制作する授業が年間 100 時間近くあり、「メディア機器を実際に自分で使ったことがあるか」という図5のグラフからも分かるように、Aの児童は普段からメディア機器を頻繁に利用しており、機器の扱いになれている。従って、その事が自信につながり、統計にあらわれたと言えそうである。親しみを持っているとはつきり言えるということは、機器の扱いに抵抗がなくなっているということであり、メディア機器を用いた学習に積極的に参加していくことにつながると考える。

### (4) 総合学習の授業で学んだことは、普段の生活でも役に立つと思うか

総合学習の時間で学んだことの有用性に対する回答結果は図6に示すとおりである。情報教育を実施しているB小・A小の2校の方が、僅差ではあるが「役に立つと思う」「どちらかといえば役に立つと思う」という回答が、C小よりも高い。また、「どちらかと言えば役に立たない」「役に立たない」と答えた児童は、C小が 1.8%、これに比してB小では 5.6%、A 小学校でも 16.2%と、情報教育を実施している2校の方が、高い割合となった。

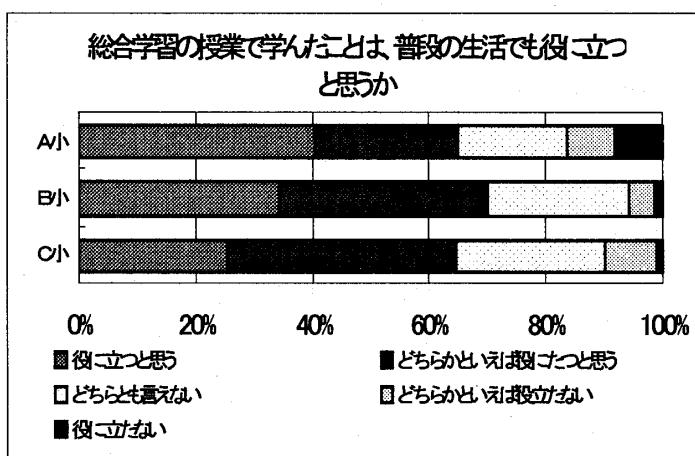


図6 普段の生活で役に立つか

### (5) 総合学習の授業を受けるようになってから、TVや新聞、友達などの身の回りの情報に疑問を感じたり、違う視点から考えたりすることが増えたか

この質問には、総合学習の始まった4月の時点と比べて回答してもらい、「増えた」「どちらかといえば増えた」と答えた児童の割合が、C小では 63.9%、B小は 52.1%、A小でも 45.9%となつた(図7参照)。情報教育を実施し

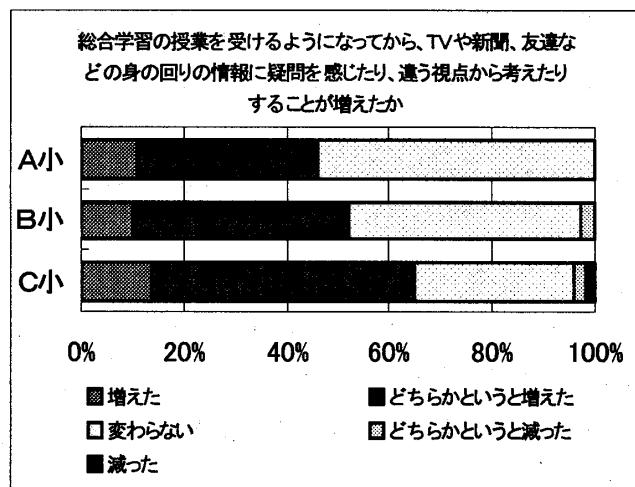


図7 複眼的な見方

ている2校の方が低い割合となった。また、「変わらない」と答えた児童の割合は、C小では37.8%、B小では36.6%、Aでは37.8%と、3校とも3割程度の結果となった。

「総合学習の授業で学んだことを、親や兄弟に教えたり、また、一緒にTVを見る時などに、疑問に思ったことを聞いたりすることが増えたか」という質問では、「増えた」「どちらかというと増えた」と答えた児童がC小が61%、B小では56.3%、A小でも59.4%と、Bが最も少ない割合となった。「変わらない」と答えた児童は、C小が31%、B小が45.1%、A小が54.1%と、Aが最も高い割合となっていた(図8)。

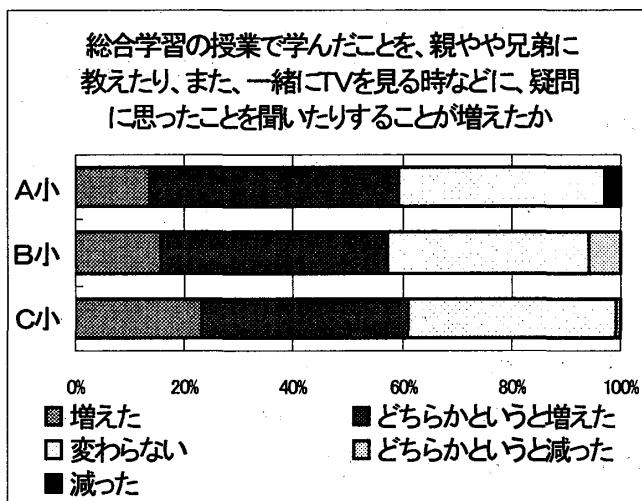


図8 問題意識の変化

以上の結果から、情報教育を実施していないC小と情報教育を実施しているA小・B小の2校の間には、極端な数値の差はあらわれなかつた。むしろ、C小の方が、「問題意識が高まつた」という結果でB小およびA小の2校よりも高い数値がでており、情報教育を実施しているからといって、周囲の事柄や情報に対する急激な問題意識の変化は見られないということが分かつた。この結果には、日常生活の中での経験などの要素も影響を与えているのではないかと考えた。

授業の観察に参加したA小学校では、総合学習の授業の中で、番組制作をしていた。このことにより、情報の送り手の立場での経験を通して、特にTVに対する問題意識が高まるのではないか、と仮定していた。しかしこの質問からは目に見えるかたちでの結果を得ることはできなかつた。情報発信の制作活動のなかでの台本づくり・編集・ナレーションといった一連の作業の中で、「どの情報を伝えるべきなのか」「どうすれば受け手にうまく伝わるか」「どう表現すればいいのか」と試行錯誤し考えをめぐらすことは、メディア・リテラシーの基礎を築くことに深く関わり、情報活用能力の向上につながっていくと考える。

## 2. 情報活用の能力に関する調査結果

情報教育が行われている学校（C小）と情報教育が行われていない学校（A小・B小）の違いを見るためにアンケートを行い、情報活用能力の判断項目別に比較した。

\*以下、調査にあたり、特に変化のみられたものを取り上げて比較を進めたものである。

### (1) 収集する力

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

### 1) 辞書や辞典を引く力

わからないところがあると、辞書などで調べる活動を行っている児童の割合について、C小では5.4%（「非常に当てはまる」27.2%「当てはまる」37.9%）と最も多かった。これに対して、A小では29.7%（「非常に当てはまる」16.2%「当てはまる」13.5%）、B小では36.6%（「非常に当てはまる」11.3%「当てはまる」25.4%）であった（図9）。C小が他の2校2倍近くの差を広げて「わからないことがあつたら、辞書や辞典を多く引いて」いる児童が多いことが明らかになった。情報教育が行われていないC小であることが分かる。

### 2) 自自分で情報を収集する力

自分で情報を収集する活動を行っている児童の割合について、C小では39.8%（「非常に当てはまる」18.5%「当てはまる」21.3%）に対して、A小では26.3%（「非常に当てはまる」13.5%「当てはまる」12.8%）であり、B小では21.1%（「非常に当てはまる」5.6%「当てはまる」15.5%）であった（図10）。

C小が他の2校に比べて10%以上の差を広げて、他人から聞いて始めて知る情報より自分で収集する情報の方が多いのは、情報教育が行われていないC小であることがわかる。

### 3) 何でもひととおり知っていたいという気持ちの強さについて

問い合わせに対する肯定的な反応はC小では34.0%（「非常に当てはまる」、17.48%「当てはまる」16.5

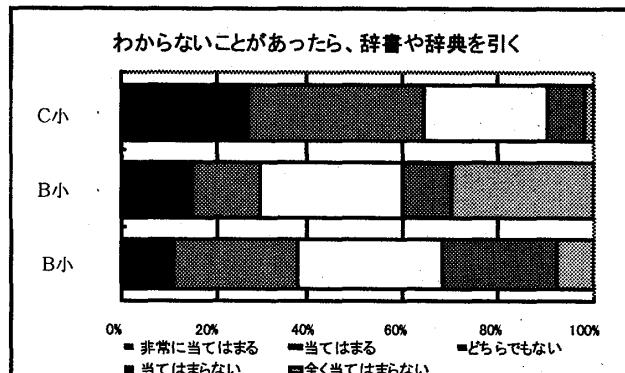


図9 わからないことがあつたら、辞書や辞典を引く

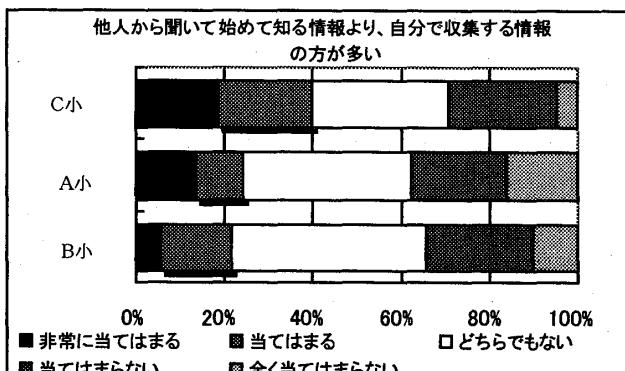


図10 自で収集する力

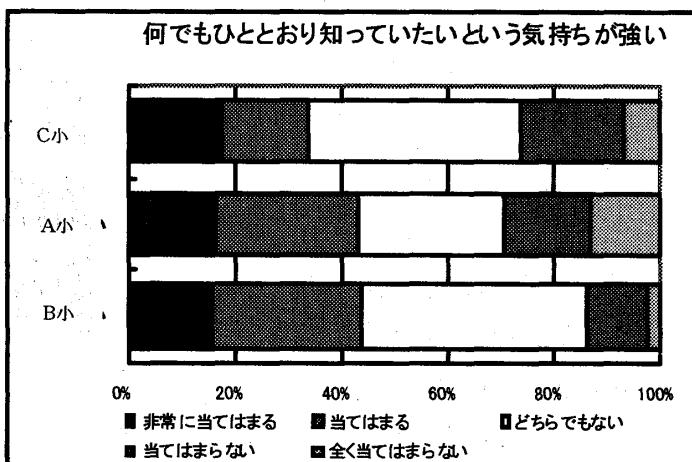


図11 何でも知っていたいという気持ちの強さ

### 三 宅 正太郎

%) に対して、A小は43.3%（「非常に当てはまる」16.2%「当てはまる」27.0%）、B小が43.7%（「非常に当てはまる」15.5%「当てはまる」28.2%）であった(図 11)。何でもひととおり知りたいという気持ちが強いと感じる児童が多いのは情報教育が行われているA小・B小ということがわかる。

(1) 収集する力では全9問を行った。上記以外には「授業でわからないう�があつたら、先生に質問したり、教科書や参考書で調べる」「新聞やテレビのニュースをよく見ている」という項目に対して「非常に当てはまる」と答えた児童が多かったのが、情報教育を行っていないC小であった。この学校では、知識を深めるための一般的な授業を通して自ら学習に必要な情報を集めるという点で収集力が高いと言えるであろう。

#### (2) 批判的に判断する力

##### 1) 人のうわさはすぐに信じない

人のうわさに対する態度を求めた「人のうわさはすぐに信じない」という質問に対する反応結果は図 12 に示すとおりである。3つの学校とも4割前後肯定的に捉えている。中でも情報教育が行われているA小が他の2校よりも「非常に当てはまる」で24.3%と最も多くと答えている。しかし一方、「全く当てはまらない」に21.6%を示している。

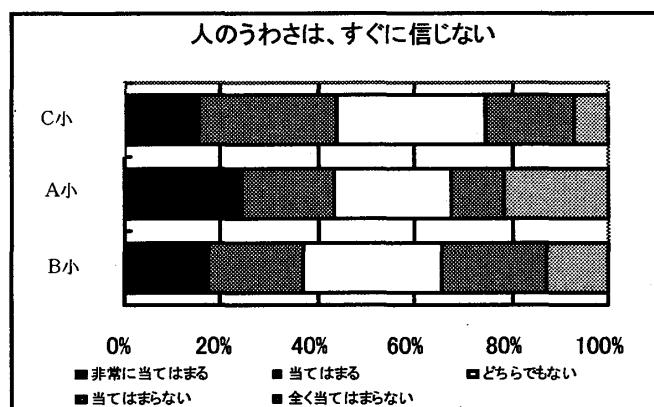


図12 人のうわさは、すぐに信じない

##### 2) メディアから伝わったことをすぐに信じない

メディアに対する態度として「メディアを簡単に信じない態度について「非常に当てはまる」に回答した児童はC小では1.9%、A小で10.8%、B小で5.6%となっている(図13)。新聞やテレビで伝えられたことをすぐに信じない児童が比較的多いのは情報教育が行われているA小・B小となる。しかし、全体的に新聞やテレビで伝えられたことをすぐに

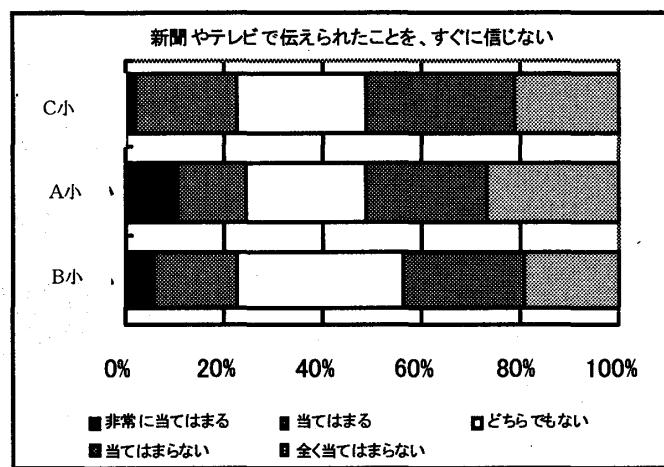


図13 メディアから伝えられたことを、すぐに信じない

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

信じてしまいがちであることが半数いることが見られる。マスメディアの発信する内容を信用してしまうことが読み取れる。このような事態に対しては意図的な指導を行う必要を示している。

### 3) 根拠を確かめる

うわさなどを聞いたときの態度として根拠を確かめる実践を行っている児童の割合は、C小では33.0%（「非常に当てはまる」11.7%、「当てはまる」21.4%）であるのに対し、A小では48.7%（「非常に当てはまる」16.2%、「当てはまる」32.4%）、B小では36.6%（「非常に当てはまる」7.04%、「当てはまる」29.6%）であった（図14）。

うわさを聞いたときに、それがどのくらい根拠があるかを確認している児童が多いのは、メディアリテラシー教育が行われているA小であることがわかる。情報の信

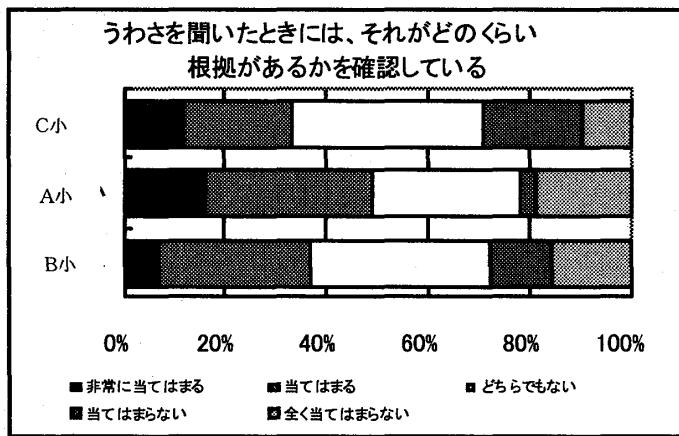


図14 根拠を確かめる

憑性について注意をする必要があることを意図的に指導する必要があることを示している。

(2) 批判的に判断する力では全10問行った。上記以外には「教科書や参考書を読むとき、重要なところに線を引く」「対立する意見があるときは、いつも両方の言い分けを聞いてそれぞれの良し悪しを判断している」という項目に対して、「非常に当てはまる」と答えた児童が最も多かったのは、意図的な情報教育が行われていないC小学校で、「テレビで知ったことを後から本などで確認することがある」「品物を選ぶとき、たくさんの広告や雑誌を見て、比較している」という項目に対しては情報教育が行われているA小学校が最も多く「非常に当てはまる」と答えていた。

批判的に判断する力は、情報教育が行われているA小学校が批判的見方や検討する力が身に付いている。これは、情報教育を通して、あらゆる情報を集めるときに、その情報を鵜呑みにするのではなく、他の情報はどうなのか？など。批判的に判断することなどが大切であると学習しているからと考えられる。

### (3) 表現する力

#### 1) 図や表の活用

図や表などのビジュアル表示をして表現する活動を行っている児童の割合は、Cでは69.9%（「非常に当てはまる」36.9%、「当てはまる」33.0%）、と半分以上の割合を示していた

### 三 宅 正太郎

。一方、A小では 43.2%（「非常に当てはまる」13.5%、「当てはまる」29.7%）、B小では 38.0%（「非常に当てはまる」14.1%、「当てはまる」24.0%）であった（図15）。

「調べたことを整理するとき、文章だけでなく図や表も活用しているか」という質問に対して情報教育が行われていないC小が圧倒的に多く、活用していると答えた。日常的な学習活動として図や表を活用する行動が

#### 2) 情報の整理

情報整理を自立的に行っている児童の割合について、C小では 63.1%（「非常に当てはまる」27.1%「当てはまる」35.9%）と半分以上の割合を占めているのに対して、A小では 24.3%（「非常に当てはまる」13.5%「当てはまる」10.8%）、B小では 38.0%（「非常に当てはまる」16.9%「当てはまる」21.1%）であった（図16）。

「集めた情報は、自分なりに整理している」と感じている児童が最も多かったのは、情報教育が行われていないC小であった。

#### 3) 資料の整理

集めた資料を整理するのが苦手な児童の割合については、図17に示すとおりである。

資料整理が苦にならない児童は、C小では 44.6%（「当てはまらない」33.0%、「全く当てはまらない」13.6%）、A小では 37.8%（「当てはまらない」18.9

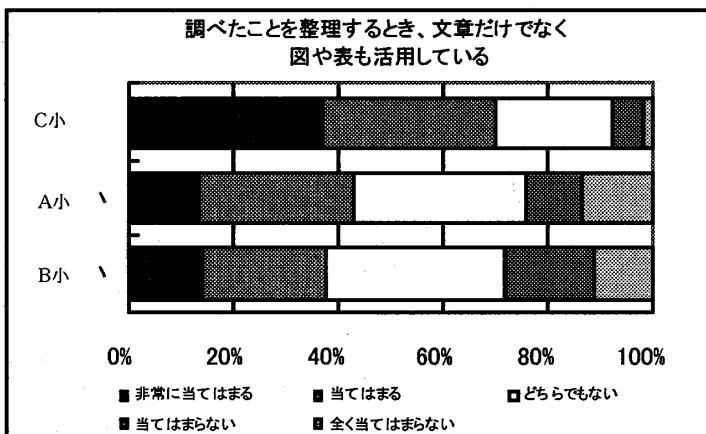


図15 図や表の活用

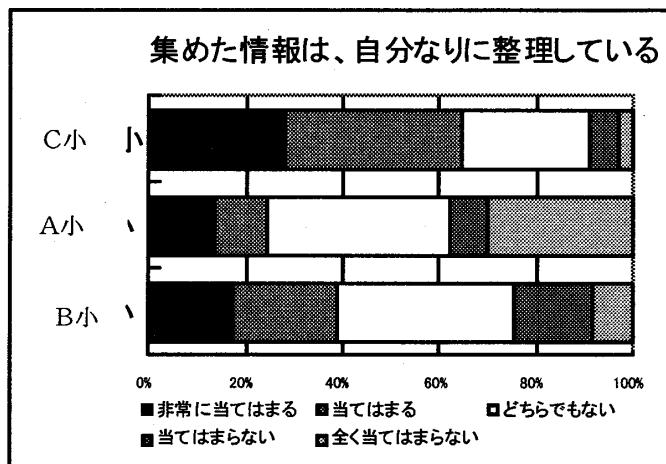


図16 情報の整理

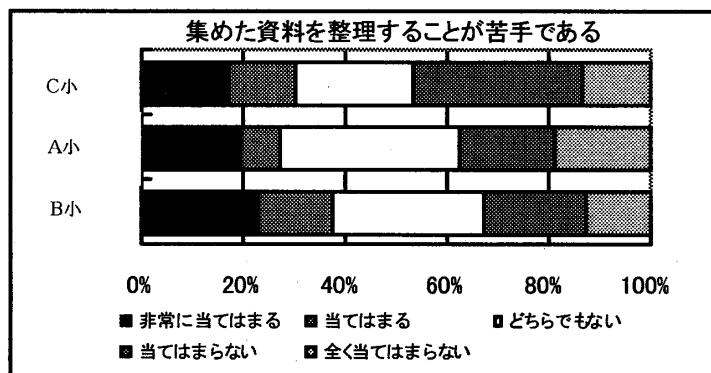


図17 資料の整理

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

%、「全く当てはまらない」18.9%)、B小では32.4%（「当てはまらない」19.7%、「全く当てはまらない」12.7%)であった。

「集めた資料を整理することが苦手ではない」と感じている児童が最も多いのは情報教育が行われていないCといふことが分かる。都市部の学校で、家庭学習などでの指導などが行き届いている可能性が考えられる。

(3) 表現する力については全6問行った。上記以外に「たくさん的情報を集めたときは、似た内容ごとに分類しているか」、「文章を理解するために、図や表に書き直しているか」という質問項目に対して、情報教育が行われていないC小が圧倒的に「非常に当てはまる」「当てはまる」という答えが多かった。

全体を通して、表現する力では情報教育が行われていないC小の児童の方が表現する活動に関しては身についている結果が見られた。情報教育ではグループで行う活動が多く、個々で行う活動については、意図的な情報教育を行っていないC小学校の児童の方が得意だと言える。

### (4) 情報を処理する力

#### 1) 道筋を立てて考える

筋道を立てて考える行動ができている児童の割合について、C小では41.8%（「非常に当てはまる」13.6%、「当てはまる」28.2%)、A小では43.2%（「非常に当てはまる」21.6%、「当てはまる」21.6%)、B小では52.1%（「非常に当てはまる」22.5%、「当てはまる」29.6%)となっていた(図18)。

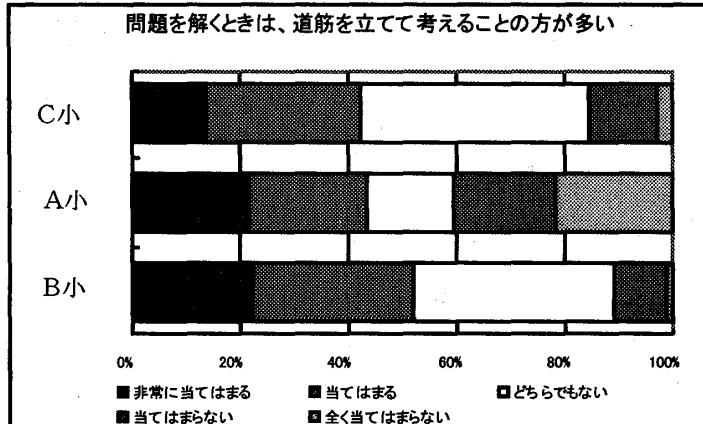


図18 道筋を立てて考える

「問題を解くときは、道筋を立てて考えることの方が多い」と答えた児童が多いのは、情報教育が行われているB小とA小だった。A小では、「非常に当てはまる」と「全く当てはまらない」と答えた児童の割合がほぼ同じであることが分かる。

#### 2) 意見をまとめる

C小31.1%（「当てはまらない」23.0%「全く当てはまらない」7.8%) A小59.5%（「当てはまらない」18.9%、「全く当てはまらない」40.5%)、B小46.5%（「当てはまらない」31.0%「全く当てはまらない」15.5%)である(図19)。

児童の大半が、たくさん意見があつたら、うまくまとめることができないと答えていた。特にA小学校では、5割以上の児童がうまくまとめられないと言う意見を述べ、他の学校に比べて多いことが分かる。

### 3) 筆者が言いたいことを理解する

C小 35.9%（「当てはまらない」25.2%、「全く当てはまらない」10.7%）、A小 29.7%（「当てはまらない」10.8%、「全く当てはまらない」18.9%） B小 21.1%（「当てはまらない」11.3%、「全く当てはまらない」9.9%）（図20）

### 国語の教科書などで筆者が言いたいことを理解すること

が苦手と感じない児童が最も多かったのは、情報教育が行われていないC小であった。そして、最も多く苦手と感じる児童が多かったのは、情報教育が行われているA小で、半分以上の割合を占めていることが分かる。

(4) 情報を処理する力では全7問であった。上記以外には「多くの資料を検討して、結論を導くことが苦手であるか」という項目に対して情報教育を行っているB小やA小では「非常に当てはまる」と答えた児童が多く結論を導きだすことの苦手さを示した。

全体を通して、情報を処理する力は、情報教育が行われていないC小学校の方が、理解する力を含めて身に付いているように見られる。

### (5) 創造的につくりあげる力

#### 1) 人のまねはしない

「新しいものや変わったものをつくり出すことが苦手であるか」という質問項目に対して、情報教育が行われているA小やB小は「非常に当てはまる」「当てはまる」と答えた児童

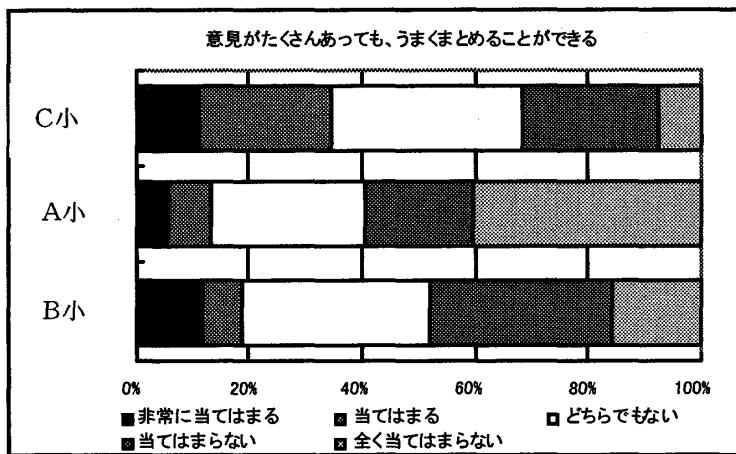


図19 意見をまとめる

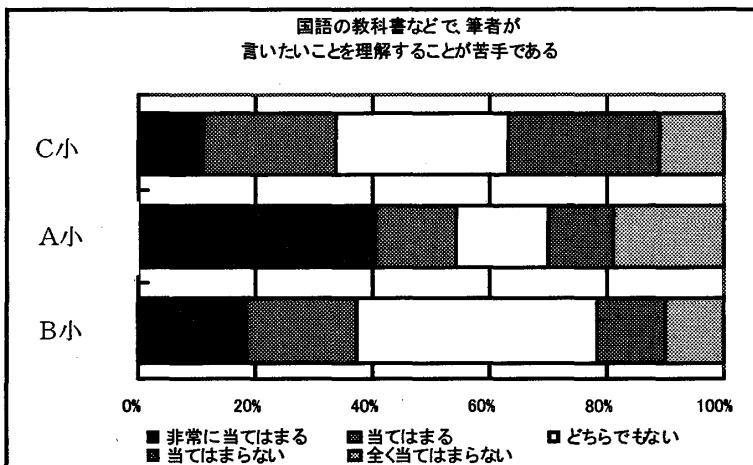


図20 筆者が言いたいことを理解する

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

が、C小と比べて多い。しかし、苦手ではないと答えた児童もC小と比べて多いことがわかる。(図21)

### 2) 自分の意見を発表する

C小 53.4% (「非常に当てはまる」20.4%、「当てはまる」33.0%)、A小 56.8% (「非常に当てはまる」40.5%、「当てはまる」16.2%)、B小 46.5% (「非常に当てはまる」18.3%、「当てはまる」28.2%) (図22)。

「課題をやるとき、人のまねはしない」という質問項目に対して、情報教育が行われているA小が、他の学校と比べて圧倒的に、まねはしないと感じている児童が多いことが分かる。

### 3) 新しいものの創造

C小 77.7% (「非常に当てはまる」35.0%、「当てはまる」42.7%)、続いてA小 62.2% (「非常に当てはまる」37.8%、「当てはまる」24.3%)、B小 53.5% (「非常に当てはまる」28.2%、「当てはまる」25.4%) の順に「自分なりの考えを持っていいる」と感じている児童が多くかった。

全体的に、情報教育が行われている学校も行われていない学校も、ほとんどの児童が自分なりの意見を持っているという答えが多かった。

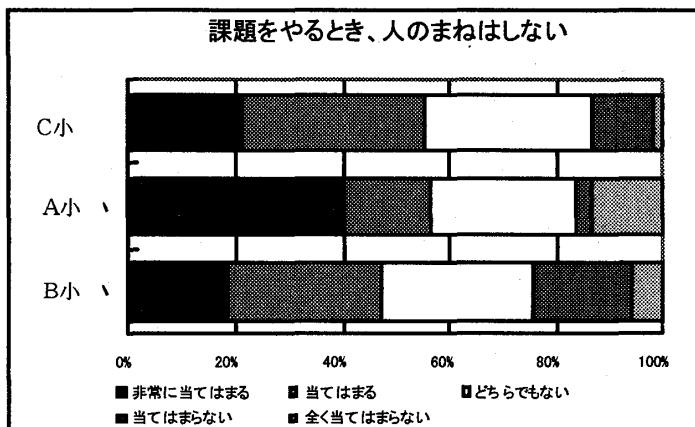


図21 人のまねはしない

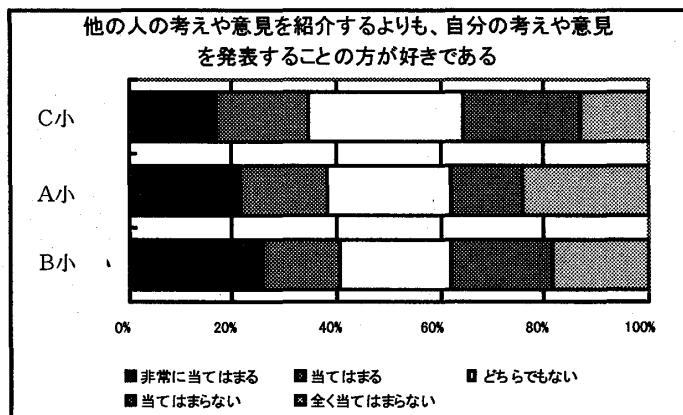


図22 自分の意見を発表する

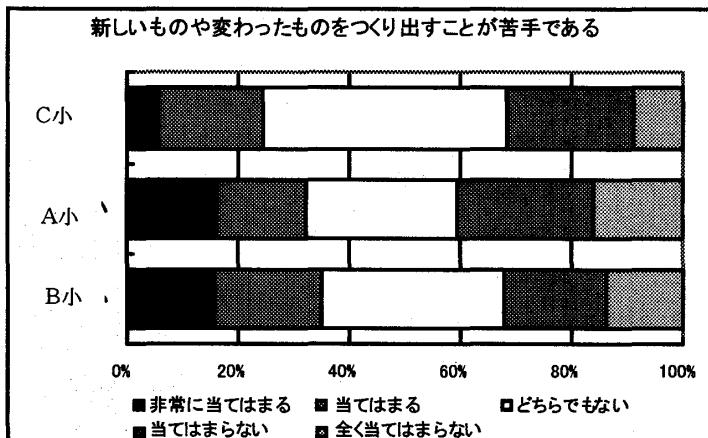


図23 新しいものの創造

(5) 創造的につくりあげる力では全10問であった。上記以外には「他人と異なる意見

### 三 宅 正太郎

を出すことが苦手であるか」、という質問項目に対して、苦手ではないと感じている児童が最も多かったのは情報教育が行われているA小で、苦手であると感じている児童が最も多かったのが、情報教育が行われているB小だった。「人よりもよりよいものをつくるように心がけているか」という質問項目に対しては、非常に心がけている児童が最も多かったのはB小で、心がけていないと最も多く答えたのはA小だった。学校によって、目指す目標が違うため、情報教育が行われているかいないかで違いが現れたのではなく、個々の学校に別々の違いが現れたのであろう。

#### (6) 発信し伝達する力

##### 1) 相手が何を知りたがっているか考える

C小 63.1%（「非常に当てはまる」24.3%「当てはまる」38.8%）と半分以上の割合を占めているのに対して、A小 37.8%（「非常に当てはまる」18.9%「当てはまる」18.9%）B小 43.66%（「非常に当てはまる」15.49%「当てはまる」28.17%）と半分以下を占めている（図24）。

「人と話すとき、相手が何を知りたがっているか考える」か、と

いう質問項目に対して、相手が何を知りたがっているか考えると感じている児童が最も多かったのは、情報教育が行われていないC小であることが分かる

##### 2) 言うべきことを整理する

「大勢の前で発表するときは、言うべきことを整理してから話す」としている児童の割合が最も多かったのは情報教育が行われていないC小であった。しかし、3校とも言うべきことを整理してから話すという児童が比較的多かった。（図25）

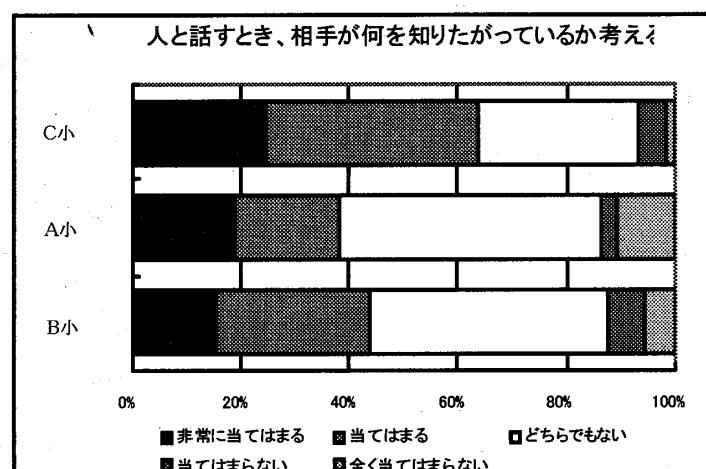


図24 相手が何を知りたがっているか考える

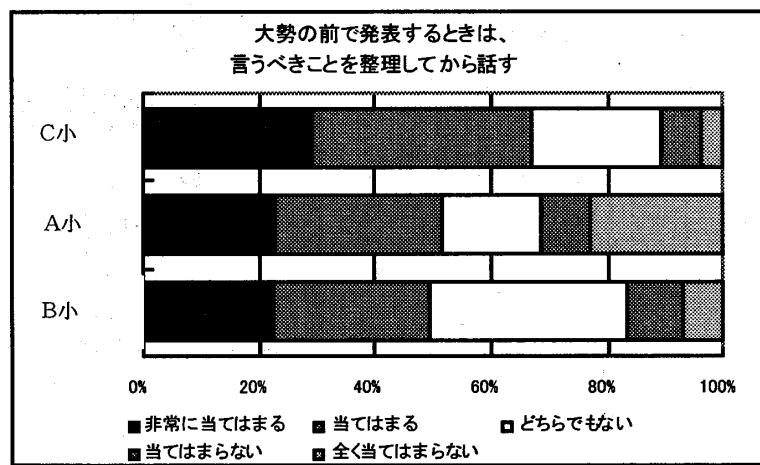


図25 言うべきことを整理する

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

### 3) 自分の考えを説明する

自分の考えを人に説明することが苦手である」という質問項目に対して、児童の特に情報教育が行われている結果は図26に示すとおりである。B小では56.34%（「非常に当てはまる」35.2%、「当てはまる」21.1%）と最も多く、続いてC小44.7%（「非常に当てはまる」23.0%、「当てはまる」21.0%）、A小40.5%

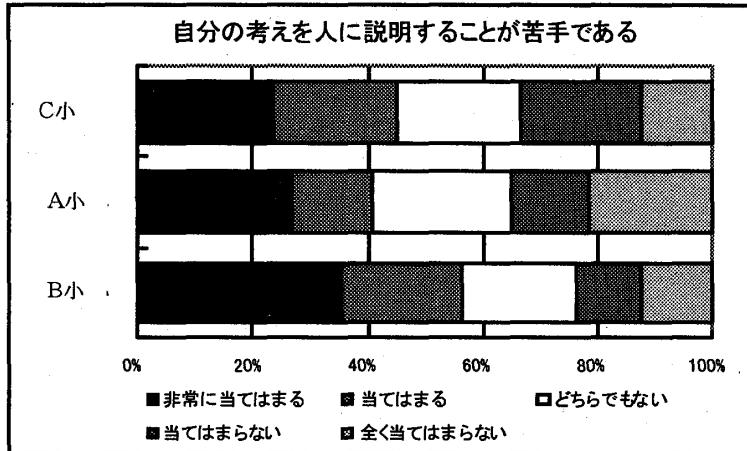


図26 自分の考え方を説明する

%（「非常に当てはまる」27.0%「当てはまる」13.5%）の児童が苦手であると答えた。その反面、苦手ではないと最も多く答えたのは、情報教育が行われているA小であった。

(6) 発信し伝達する力では全9問であった。上記以外に「人前で発表するときは、自分の中で良く考えてから話す」か、という質問項目では、情報教育が行われて台小学校の児童が最も多く「非常に当てはまる」「当てはまる」と回答した。

情報教育を行っている学校では、遠隔地や広域な受け手に対する情報の発信に多少戸惑いがあるために苦手と感じている児童が多くかったのではないだろうか。

## 6 情報活用能力に関する調査についての考察とまとめ

情報活用能力に関する調査を、情報教育の授業が行われている学校と情報教育が行われていない学校とを比較するために行った。それは、「メディアを活用し、自分にとってメディアがどうあるべきか？メディアを活用することで自分がどうあるべきか？」を授業で教わっている学校の方が、収集力・創造力・表現力・処理力・判断力・発信伝達力と言った情報活用能力が勝っているという仮説のもとで行ったものである。

一つ一つを分析していく結果、情報教育を実施している学校は、行っていない学校と比較して、情報活用能力のすべての面において勝っているとはならなかった。むしろ、情報教育の授業が行われていない学校の方が勝っていた項目が多くあった。

(1) 創造力においては、学校において目指している目標が違うためであろう。情報教育

### 三 宅 正太郎

が行われている学校と行われていない学校とで違いは現れなかった。

(2) 収集力・表現力・処理力・発信伝達においては、情報教育の授業が行われていないC小学校の児童が身に付いている結果が見られた。まず、先生と生徒が黒板に向かって行う一般的な授業を思い出してみよう。例えば、疑問に感じることがあるとして、それをどうするかである。自分から進んでその疑問に対して、自分なりの表現の仕方で友達や先生に伝え、自分の納得のいくまで情報を集めるであろう。それを自分なりに処理しなければ、授業に追いついていけなくなるではないだろうか。だから、個人個人が収集すること・表現すること・処理すること・発信伝達することに対して、意欲的になり、このような力が自然と身についているのであろう。このように見ると、情報教育を行っていないC小学校の児童は、収集・表現・処理・発信伝達の点において勝っているといえる。

(3) 一方、情報教育のほとんどはグループ活動を中心としている。社会の中での生きる力を養うという意味をも含まれており、学校内だけの活動に留まらず地域にまで足を延ばしている。グループの一員として、成長して欲しいという願いではある。しかし、児童にとっては戸惑いがあるようである。情報を収集すること一つにしても、メディアの取り扱う内容と活動範囲の広さに圧倒され、それをどう活用するかに頭を抱えている。そして、発信することに対しては、見知らない多くの人や、遠隔地などの人々へと、自分自身をどう表現していけば良いかに悩まされているようである。情報教育の授業を経験する中で、「メディアを始め情報の実際に直面し、どうメディアを活用したら良いのか?」そして、「自分自身どう表現して行ったらいいのか?」という難しさを肌で感じていることが推察でき、情報活用教育を体験している児童のほうが、収集・表現・処理・発信について苦手だと感じることが多かつたのではないだろうか。

(4) 情報教育の授業を経験している児童は批判的に判断する力が最も勝っていた所が一番特徴的である。あらゆるメディアを活用するときに、情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に読み解いて行くことも必要であることが、体験的に理解しているものと考えられる。

情報活用能力のうち、収集・表現・処理・発信伝達は身についていたが、批判的に判断することについては特別、意図的な指導が必要であり、自然には身につきにくいものである。

批判的判断力を育成するためにも、メディアの制作などを実際に体験することによって、社会に出て実際に直面したときに生きる力がつくという面で情報活用能力に関する授業はこれからも盛んにしていく必要があると考える。

### 7 おわりに

情報教育とは、情報化社会と言われている社会の波に耐えられるように、授業を通してパソコン・インターネットなどの操作を学ぶ目的のためだけで行われているのではないと言う

## 児童の情報活用能力の育成に関する調査

ことが明らかになった。そこで、子どもがメディアを活用して、子どもが自分にとって必要な情報が集められメディアを上手く利用しながらコミュニケーションの幅を広げていくことが目的とされているところに着目して研究を進めてきた。そして、情報活用能力に関する調査を情報教育の授業が行われている学校と情報教育が行われていない学校とを比較する調査を行ってきた。メディアを活用し、自分にとってメディアがどうあるべきか。メディアを活用することで自分がどうあるべきか、収集力・創造力・表現力・処理力・判断力・発信伝達力と言った情報活用能力の面から見て、情報教育の特徴を明らかにしようとしてきたものである。調査結果の分析を通して、情報教育実践した児童と、行っていない学校の児童が、情報活用能力の視座から見て、特徴的なことが明らかになった。

情報教育をうけることにより、メディアから受ける情報のうち自分にとって何が必要なのか、また、たくさんの児童に発信するためには、情報をどう処理して表現していったらよいのかという点について児童にとっては多少戸惑いがあるように見受けられた。しかし、情報教育を受けた児童にとっては実際にメディアの制作を体験することによって、今後、メディアを上手く利用しながら社会に対応していく必要があると考える。

本研究を進めるにあたり、井上 千鶴、佐藤 亜衣さんにはデータ処理、分析などに多大のお世話になりました。ご協力いただいたO市立C小学校、B市立B南小学校、K町立A小学校の児童や先生方。大分県立芸術文化短期大学のメディア論（三宅担当）受講生ほか、この研究に関わっていただいたすべての皆様にこの場を借りて厚くお礼申しあげます。

### 【 参考文献 】

田中博之 「マルチメディアリテラシー～総合表現力を育てる情報教育」 財団法人日本放送教育協会 1995年

水越 伸 『新版デジタル・メディア社会』岩波書店、2002年

三宅正太郎 「学習意欲を高める教授行動の分析に関する研究(1)－因子分析による教授行動と学習者特性の分類－」大阪府科学教育センター研究調査部・教育計画研究室 研究紀要 第4号 1985年

「放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書」 総務省 2000年

臨教審だより、1986年1月臨時増刊、第一法規、p.95

文部科学省の「調査研究協力者会議 1998/08 最終報告」より  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/index.htm)

園屋高志 電子教室 「インターネット概論 第五回」～情報活用能力の必要性について～  
鹿児島大学教育学部 <http://www.qtopianet.com/fureai/kyositu/0005/0001.htm> より

### 三 宅 正太郎

#### **A Study of Developing Information and Media Literacy in Elementary Children**

Mainly children's greediness for learning and the promotion of the information use ability

The study activity that introduces the computer into children's greediness for learning and the academic training including the time of the information use synthesis study is established.

The information use ability promotion is requested as the aim. However, it is a far one to the promotion of the true information use ability when the information education has stayed at the stage of the equipment operation.

Information was understood including the operation of information and critically to acquire and to promote the power that was able to be used, the current state was understood.

As for the promotion of critical use ability, it has been understood that intentional guidance is necessary though the operation of the equipment can be acquired by the education at the school and home.